

## 次わあ宝塚、宝塚でえ〜す。

ふちんかん

まだ取材は始まったばかり、コンプリートできるかどうかなんてさっぱり分からない状態だったので、くじを引くのも気軽なものだ。それでも同じ範囲を行ったり来たりするのは、取材とはいえ楽しいか?と問われたら楽しいわけではないので、それなりに効率よく廻りたいとは思っていた。

現在地はスルッと関西の西のはずれ・姫路である。できれば西のエリアである、有馬温泉・宝塚・大阪空港をつぶしてしまえば、二日目が楽になる。

山陽電鉄の駅前でくじを引くことに。9枚の封筒から上の3つの駅のどれかを引けばいいという、後から考えれば楽な状況ではあったが、どんなものでもくじを引くという行為はドキドキするものだ。

ここで浜大津や加太・奈良・高野山など梅田以外のターミナル出発になる目的地を引いてしまうと、非難GOGO も考えられるところだったが、封筒に書かれていた駅名は『宝塚』だった。

まあまあ次善の引きでほっとした。

目的地がどこであろうと、次に乗る列車は決まっている。山陽電鉄の特急だ。

帰りの特急はクロスシートだった。素直に嬉しい。ロングシートだとどんなに長時間乗っていようと、お買い物とかせいぜいちょっとお出かけな気分だ。それがクロスシートだと「旅」って雰囲気になる。特に山陽電鉄の特急車両は一人用クロスシートがあり、そこに座ると孤立感が高まり旅の雰囲気が盛り上がる。

山陽電鉄なんて田舎鉄道と侮っていたが、なかなかお客さんは多い。姫路を出るときには余裕で占領できていたクロスシートも徐々に相席になっていく。加古川を越えるあたりからは立ち客もいるようになった。それでも車窓は、明石海峡大橋が目立つくらいで、あとはレンゲの畑地に、ぽつぽつと新築の一戸建てが建つという、のどかな郊外風景だ。

車掌のアナウンスに特徴があった。語尾が鼻に抜けるように話すので、最後の言葉が聞き取れない。「次わあ加古川、加古川でえ〜」文字だけ見ると江戸っ子言葉のように映るかもしれないが、実際はねちっこい発声で、心地よくないアナウンスだった。

新開地で阪急神戸線の列車に乗り換え。続いて西宮北口で今津線の列車に乗り換え。どちらも混んでいた。



# 宝塚駅

宝塚と言えば歌劇。観劇する時間はありませんから、せめて宝塚大劇場へ行って、現在上演中の演目と入場料を調べてきて下さい。

バウホールは休演のはずです。

( 花 月 雪 星 宙 ) 組公演

演目 1 ( )

演目 2 ( )

入場料 S ( )円 A ( )円 B ( )円



『宝塚』に 10:42 到着。指令書を見ると予想通り、宝塚歌劇に関するものだった。花乃みちを5分も歩けば到着。簡単にミッションクリアした。



# 有馬温泉へバスの旅

ふちんかん

さて、次の目的地は自動的に『有馬温泉』に決まっている。この取材の計画段階のとき、二日間で10カ所、しかもランダムに廻るのは難しいという意見が出て、『宝塚』と『有馬温泉』、『浜大津』と『国際会館』はセットにしようと決まったのだ。今になって思えばなかなか的確なセッティングだと感心する。特に今回の『宝塚』と『有馬温泉』のセットは秀逸だ。鉄道地図だけ見ているとけっこう離れているこの2駅間だが、実は阪急バスが直接結んでいるのだ。スルッと関西は鉄道だけでなくバスも加盟しているメリットを活かすわけだ。しかも宝塚から有馬といえば、阪急電鉄の前身・箕面有馬電気軌道が開業当初に目指した最終目的地を辿る旅でもあるのだ。

さて花乃みち途中のケーキ屋さんでプチシュークリームの買い食いするという余裕を見せた後、宝塚駅へ戻る。途中、Sメンバーが薬屋に立ち寄りということで、他のメンバーは「きっと(息子の)K君のグッズを買っているんだねえ」とほほえましく思っていたが、実際には二日酔い対策のドリンク剤を買ってきたので、皆で失笑した。

さて阪急の宝塚駅を抜けてバスターミナルへ。止まっていたバスが偶然にも有馬温泉を通る山口営業所前行きだった。後で調べてみると、11:30 発のこのバスを逃すと次は 12:10、その次は 13:10 だからけっこう貴重なバス便だ。

世はゴールデンウィーク、道路もかなり混んでいるらしく、バスの運転手からかなり遅れるというアナウンスがある。それでも鉄道を使って行くことを考えれば、超ショートカット路線なので、ここは道なりに任せるしかない。

武庫川を越えるとバスは六甲山の北東端をよじ登っていく。六甲山といえば、大阪平野から眺めると一枚の壁のように見えるが、実際にはいくつかの断層で切られた階段状の山地だ。宝塚からのこのバスルートも、U字カーブの続く急坂を上ったかと思うと、断層段丘面の平地を走り抜け、また急坂、という繰り返して高度を上げていく。最後に溪流沿いに下って標高 360m の有馬温泉へ。  
12:17 着。

有馬温泉は説明の必要がないほど有名な温泉だ。湯治客・観光客に混じって六甲山ハイカーも多い。



有馬温泉駅で開いた指令書どおりに温泉会館で足湯に浸かる。肘まで疲れという指示だったので、かなり無理な姿勢で肘を浸けた。周りには観光客が多く、足をつっこむだけでも空きを待たなければならない状況で、変な姿勢で肘を浸けるのはなかなか勇気のいることだった。しかも湯が熱い。

# 有馬温泉駅

温泉会館が建て替えられ、今はやりの足湯もできました。この足湯に、足とは言わずに袖まくりの上、肘まで浸かって旅の疲れをいやしましょう。



足湯は上流側ほど熱く、さすがの軍曹さんも初め泣き言を言うくらいの熱さ。それでも最後はしっかりと浸かっていた。

ここではみんなフレンドリー。「その辺は熱いで」「このあたりがちょうどいいんとちゃう」初対面の観光客同士でも気軽に話ができる雰囲気があった。

取材陣は指示通り腕まくりをしています。

